

オリエント／オクシデントを越えて — ロシアの「オリエンタリズム」研究によせて —

浜 由樹子

はじめに

1978年に発表されたエドワード・サイードの著書『オリエンタリズム』¹が学界に与えたインパクトは、深甚かつ広範にわたるものであった。ヨーロッパ（その後にはアメリカ）は、「オリエント」を異質な他者として、エキゾチックで、非合理的で、後進的で、野蛮な、そして時として墮落した、官能的なものとして想像し、支配の対象として描き、「オリエント」に関わる文化や学問研究は帝国主義に資する機能を果たしてきた、というサイードの主張は、様々な反応を呼び起こした。

主要な批判の一つは、サイードの設定する「オリエント」の範囲があまりにも限定的であるというものである。周知の通り、サイードは、「オリエンタリズム」の研究対象を、イギリス、フランス、アメリカにおけるアラブ、イスラム観（地理的範囲でいえば近東と北アフリカ）に絞っている。けれども、オクシデント（あるいはヨーロッパ）に対する「オリエント」（ないしはアジア）が指し示す範囲は、実際にはそれよりもずっと広く、さらに、「オリエンタリスト」（特に東洋学者）のカテゴリーにしてみても、東洋学の長い伝統を持つドイツ、ロシア、オランダなどの事例を考察に加えていないことに対する批判である。

また、ロバート・アーウィンに代表されるような批判的応答²は、実際に「オリエント」に向き合ってきた東洋学者たちが、皆おしなべて差別的で威圧的であったわけではなく、むしろ、研究対象に対して好意的、同情的であった反証例も多く存在したことを示してきた。つまり、人文学者サイードが鳥瞰的に描き出した「オリエント対オクシデント」という二項対立的図式が、地域研究者の現実を反映していない、という批判が込められていたのである。

ロシア研究者から唱えられた異議の多くも、こうした「オリエンタリズム」の普遍化、一般化に対する疑問に起因している。ここ数年、めざましい成果を上げているロシアの「オリエンタリズム」研究によせて、本稿では、その意味するところを探ってみたい。

欧米におけるロシアの「オリエンタリズム」研究

ロシアにおける「オリエント」（あるいは「アジア」）イメージは、実はそれ自体が一大テーマであって、学界においては既に相当数の研究蓄積がある。というのも、ヨーロッパとアジアに跨る広大な版図を有し、イギリスやフランスがイメージした「オリエント」世界のみならず、東アジアから南アジアに広がる諸地域と国境を接し、領域内外の「アジア」との長く密な交流の歴史を持つ多民族帝国ロシアにとって、西欧をモデルとしたトップ・ダウン型の近代化を始めて以来、「ヨーロッパか、アジアか？」「オクシデントか、オリエントか？」というアイデンティティの問いは、事あるごとに立ち現れる難問であり、まさに知の粋を集めて論じられてきた永遠のテーマだからである。ロシア人たちが「オリエント」「アジア」を他者とみなしていたのか、あるいは、自己同一視していたのかという問題は、果たしてサイードのような観点からロシアの「オリエンタリズム」を語ることは出来るのか、という疑問を投げかけるのである。

そのため、サイードが提供した図式に刺激され、これをロシア帝国やソ連に当てはめてみようとする研究者が現れたことは、まったく奇異なことではない。特に、1990年代半ば以降、ロシアの「オリエンタリズム」研究は急速に発展した。ソ連邦の解体後、それまでアクセスが容易ではなかった史料の公開も手

伝って、ロシア（旧ソ連）そのものの多民族性、特に、テュルク系やモンゴル系少数民族や、ムスリム、チベット仏教徒の存在に関心が集まるようになった。民族政策や、少数民族が置かれていた状況、内実に迫る研究が長足の進歩を遂げる一方、人文学から発信されたポストコロナル批評の影響を受け、特に欧米の学界では、サイードの議論と結び付くかたちで、このテーマの研究は進んできた。

嚆矢としてしばしば言及されるのは、文学研究におけるスーザン・レイトンの研究³であろう。19世紀ロシア文学における植民地表象を、ポストコロナル的視点から再評価した研究として、今でもしばしば参照され続けていることから、その影響力の大きさが推察される。歴史・思想研究におけるパイオニアとして、北方の少数民族とロシア人の関係を描く中で、「異族人（инородец）」概念の起源にも迫ったユーリー・スレズキン⁴、19世紀半ばのロシアの極東地域に対する政策（特にアムール川流域併合）とそれを支えたイデオロギー、イメージを検証したマーク・バッシン⁵、帝政後期のカザンを舞台として、多民族性とロシア人の自己認識形成の關係に切り込んだロベルト・ジェラシ⁶、加えて、ロシアの東洋学に関する新たな研究潮流の先駆的な存在であるダニエル・ブラワーらの論文集⁷も挙げておく価値があるだろう。これらは、サイードの議論を意識しつつ、ロシア帝国がその内なる「オリエント」「アジア」をどのように認識し、扱ってきたのか（あるいはその逆）という問題に、イメージや心象地理のみならず、政策や学問研究の関わりからも切り込んだ研究であり、後進に大いに刺激を与えた。

ただ、こうした研究の結果、サイードの主張を補強するような事例がどれだけ拾えたかという点、これが問題で、それと同じくらい、あるいはそれを上回る程の反証が同時に出てきたのである⁸。結論から言えば、「オクシデント」と「オリエント」の混じり合うロシアにおいて、両者は明瞭な対立關係にあるわけではないし、ロシアの知識人や東洋学者たちの中には、サイードが東洋学者に欠如し

ていると断じた心からの共感や、自己同一視を、様々に体現する者たちが少なからず存在したのである。そもそも、自らの中に「オリエント」の要素を認め、実際にタタール、ペルシア、バシキール、ブリヤートなどの「オリエント」に出自を持つ場合も少なくなかったロシアの東洋学者や文化人たちに、首尾一貫した外在性など求められようか。ロシアにとって「オリエント」は、完全な他者ではあり得ない。

サイード自身が率直に認めているように、「ドイツ、イタリア、ロシアその他でも疑問の余地なく決定的に重要な意味をもつ研究がないわけではなかったが、イギリス人、フランス人、アメリカ人の著作の質と一貫性と量は、それを断然凌駕しているのである〔傍点、筆者〕。」⁹「質」に関しては反論の余地があるだろうが、その「一貫性」においては確かに、ロシアの東洋学者や作家たちははるかに曖昧で、サイードの明示するような図式にはあてはまらないだろう。今となつては、ロシア人が一様に「オリエント」の諸民族を差別し、抑圧していたと糾弾するカルパナ・サーヘニーの著書¹⁰などは、学術研究としてはあまりに一面的で、イデオロギー色が強く、時代遅れの感が否めない。

このように、近年の研究の多くは、主にサイードから派生した「オクシデント／オリエント」、「自己／他者」、「支配／被支配」の固定的な構図に批判的である¹¹。おそらく、先述のポストコロナル批評とは別に、この流れを後押ししたものは、歴史研究や政治研究における一連の「帝国論」であつただろう。ポスト冷戦期の新しい国際秩序を模索する動きの中で、西欧を先行モデルとする国民国家とは異なる国家の在り方を再評価する動きとして、あるいは、先にも述べた史料公開の下にあって、「大陸的」な多民族帝国として独特の支配形態を有していたロシア帝国の実態をあぶり出そうとする試みとして、または、新たに独立国となった15の旧ソ連構成国それぞれの「ナショナル・ヒストリー」構築の中から生まれた再解釈として、ロシア帝国論は数

々の成果を生み出してきた¹²。そこに、ロシア帝国をあたかもロシア人の国民国家のごとく描出してきた旧来の研究への反省があったことは疑いがない。同時に、ロシア史を、「ロシア人对非ロシア人（「異族人」）の対立構図」として描くことの限界が明確に意識されるようになったことも、「オリエンタリズム」的図式をロシア史に当てはめることに懐疑的な研究姿勢を強める要因となった。

こうした背景から、その後も注目すべき研究が続々と現れる。ロシアにおける（「オリエン」）とも部分的に重なる）ステップの植民地化プロセスとそのイメージの変遷を描写し、やがてロシア帝国ではそれが不可欠な要素となったことを指摘したウィラード・サンダーランド¹³、新史料に依拠して、ロシア帝国とムスリム臣民との興味深い共存関係を描き出したロバート・クルーズ¹⁴、分析の時期的な射程をソ連時代へと伸ばしたマイケル・ケンパーらの論文集¹⁵などは、いずれもその流れの中に位置づけられる。

なかでも特筆すべきは、文学、音楽、絵画や建築といった表象文化から東洋学に至るまで、そこに見出される様々なアジア（オリエン）・イメージを、大局的な歴史の流れの中に位置づけつつ総論的に論じたデイヴィッド・シンメルペンニク=ファン=デル=オイエの研究¹⁶と、ロシア帝国の東洋学者と非ロシア系民族の知識人との交流から、ロシアの「東／西」を再考したヴェラ・トルツの研究¹⁷であろう。特に前者は、個々の研究の専門性が高くなる傾向の中であって、全体の見取り図を示す概説書としても、非常に大きな意味を持つ。いずれも、ロシアにおける「オクシデント／オリエン」概念が、サイド的な構図に比べてずっと曖昧であり、そもそもロシアとは、そのように明確な東西区別など存在しない、むしろ両者が混交する独特な空間なのではないかという問題を、実証的かつ説得的に提起している。

ロシアにおける研究動向

興味深いのは、これらが主に欧米の学界の

傾向であって、ロシアの研究動向はこれとはまた異なる様相を呈していることである。ロシアの学界では、サイドの議論が、欧米における程の影響力を持たなかった。その理由としては、以下の4つの可能性が考えられる。

第一に、そもそも『オリエンタリズム』がロシアで翻訳されたのは、ようやく2006年になってのことで、学界におけるサイドの修正が進んだ後だったこと。

第二に、サイドの行った、帝国主義列強による文化的支配構造の告発が、欧米の学界では衝撃的な程に新鮮であったとしても、ロシア（旧ソ連）では必ずしもそうではなく、むしろ、古色蒼然としたものとして映った可能性さえあるということである。ヴェラ・トルツが指摘したように、東洋学や植民地文学を「帝国主義の手先」とみなすソ連時代のアプローチは、サイドを先取りするものであった¹⁸。つまり、サイドの『オリエンタリズム』は、視点としてはソ連時代から既に馴染みのあるもので、ロシア人研究者にとっては「逆輸入」に過ぎず、特に新味が感じられなかったか、あるいは、比較的若い世代からは、ある種の「ソ連アレルギー」から敬遠された可能性がある。

第三に、一部の研究者の中には、自らを「オリエン」の側に位置付け、『オリエンタリズム』を欧米批判の書として受け止める向きがあったということである。これは、ロシア語版の『オリエンタリズム』に付された「あとがき」にも如実に表れている。

「あとがき」の筆者は、全非ヨーロッパ世界を「アジア」「東方」「オリエン」と等置した上で、「東方（восток）」が「オリエン」と同じく否定的ニュアンスをもって用いられることを指摘している¹⁹。そして、ヨーロッパの境界にあり、「東方であると感じられ」「オリエンタ化された」地域として、正教徒とムスリムが住み、オスマン帝国の支配下にあった歴史を持つバルカン、東方の影響下にあった経験を持つ南欧の一部、そして、「広大で恐ろしいヨーロッパの東方——すなわち、我々」としてロシアを挙げている²⁰。つまり、こう

した見方をした人々は、ロシアを差別され、抑圧される「オリエント」側に同定して読んでいたので、欧米の研究動向とは対照的に、『オリエンタリズム』のプリズムを通して自らの歴史を批判的に眺めてみようとする意識が希薄だったということでもある。ただ同時に、ここには、ヨーロッパから見れば「東」に属し、アジアにおいては「西」として認識される、というロシアのアイデンティティの揺らぎが、今日にも依然として生きていることが確かめられる、ともいえるだろう。

そして最後の理由は、サイドという知識人の政治的立場にある。同上の「あとがき」は、2003年9月にサイドが亡くなった時に書かれたアメリカ各紙の追悼記事が、彼の研究者としての功績と共に、あるいはそれ以上に、パレスチナ問題におけるサイドの政治的スタンスに対してコメントしていることを紹介する。それは例えば、「過去50年でもっとも卓越した知識人」という評価から、「ウサマ・ビン・ラディンの大隊よりも、すぐれてジハードに奉仕した」「鋭い批判者で憎悪の伝道者」といったものまで、「危険な知性」の死に際してなお、論戦が止まなかったと述べている²¹。そしてさらに、全体の3分の2近くを費やして、パレスチナ問題についてと、アラブ・イスラエル問題に対するサイドの立場、その「戦い」を論じるのである。この扱い方が示すのは、要するに、ロシアの学界・言論界では、パレスチナ寄りの論客、研究を通じて政治的発言力を行使する知識人としてのサイド認識が、人文学者としての彼の評価に先立っていたことを表しているといえよう²²。穿った見方を付け加えるならば、知と権力の関係を論じるサイド自身が、パレスチナ問題においては政治に限りなく接近していたわけで、「インテリゲンツィア」に醒めた視線を送るポストソ連時代の研究者には、やや警戒されがちであったとも考えられないだろうか²³。

もちろん、『オリエンタリズム』の紹介が遅れ、受容が進まなかったとしても、史料公開の波に洗われて、帝政時代の東洋学について

の研究はロシアでも進展をみせている。例としてワシーリー・V・バルトリドを始めとする東洋学者たちの著作集やアンソロジーが次々と編集され、再版、出版されている²⁴。東洋学自体は、1970年代のソ連では既に重要な研究対象として認められていたが、近年の再版の動きには、今日的視点からの再評価が伴っているといえる²⁵。先のバルトリドを取り上げるならば、昨今の政治的文脈から「脅威」とみなされがちなイスラムに対する当時のアプローチが、いかに冷静かつ客観的で、時に対象に寄り添ったものであったか、そして、20世紀初頭のロシア（ソ連）におけるイスラム研究や少数民族研究が、現段階から見ても評価に耐えうる豊かさをどれ程備えていたかを、再確認しているようである。そこではさすがに『オリエンタリズム』への言及こそ散見されるものの、影響はそこまで深く及んではないようである。あえて『オリエンタリズム』を介せずに、ロシアの東洋学を再評価する方向に進んでいるといえるかも知れない。

他方、文化表象に関する研究は少しずつ始まっているようであるが²⁶、やや出遅れ気味の感が否めない。「オリエンタリズム」という用語も、サイド以前の意味で使われているものも多く、欧米の研究動向とは実に対照的である。

『オリエンタリズム』の限界と貢献

このようにして見ると、サイドの『オリエンタリズム』が引き起こした反応は、各地域の研究動向のみならず、それぞれの自己／他者認識をも写し出す鏡であったともいえる。それはさらに、研究者と政治的現実との関係に対する自覚、認識を試しさえもする。

ここで、『オリエンタリズム』に対して寄せられた批判と論点とを、主にロシアの文脈に引き寄せて、今一度整理してみよう。

やはり最大の論点の一つは、「オリエント」概念の曖昧さにある。帝国主義時代のイギリスやフランスにとっての「オリエント」は、近東や北アフリカのアラブ、イスラム世界であったかも知れないが、ロシアにとってのそ

れは、国境の外のオスマン帝国、ペルシアから、中国、日本のような国々であることもあれば、ロシア帝国内のステップの遊牧民やカフカスの山岳民、テュルク系民族やモンゴル系民族であることもあった。当然、時代や社会階層によって、イギリスやフランスにとっての想像上の「オリент」と、重なりもすれば、ずれもした。

しかし、そもそも、「西」も「東」も、「オクシデント」も「オリент」も、何ら中立的で固定的な概念ではない。それぞれが指す地理的範囲も、含まれる意味も、地域や時代といった特定の条件下で変わり得る。つまり、流動的な「西」「東」という概念自体が歴史的考察対象なのであって、『オリエンタリズム』が投げかけてきた問題の一つこそが、それではなかったか。サイードの扱う「オリент」が（ひいては「オクシデント」も）、あまりにも狭いという指摘はともかく、「オリент」の範囲が一致しない、確定できないという批判は、その意味では、的を射てはいないのだろう。むしろ、主体によって「オリент」の意味するところは異なり、自己と他者の境界線は可変的で、透過性を持つ。このことを前提に、解明されるべきは、いかなる条件下で、どのような含意を持ってその概念が用いられ、時に政治的文脈に即して変容するのか、という点であろう。そう考えるならば、ロシアの事例は、「オリент」のイメージ研究の厚みを増すための重要な貢献をしてきたといえる。

もう一つの争点は、『オリエンタリズム』が、異文化間の豊かな交流の側面を削ぎ落とし、対立の再生産を促しているという批判にある。ロシア語版の「あとがき」で紹介されていた「憎悪の伝道者」というアメリカの紙上のサイード評は、その表れである²⁷。

これに対して、『オリエンタリズム』の二項対立図式に批判的な研究者たちは、植民地主義下の非対称的な関係の下にあってなお、文化の接触や混交が生み出す（逆説的でさえある）豊かな創造・創作が、すぐさま支配と従属を正当化するイデオロギーに転化すると

は限らないと、実証を積み重ね、論じてきた²⁸。近年の「コンタクト・ゾーン」²⁹や「ミドル・グラウンド」³⁰の議論は——管見の限り、ロシア研究者にはまだ積極的に採り入れられていないように見えるが——、サイード的世界観に対する一つの批判的反応としての意味を持っているといえるだろう。

サイードの『オリエンタリズム』それ自体の知的貢献度は疑いないものであったが、同時に、それに対する地域研究者や歴史家たちの反論もまた、豊かな研究成果を生み出し続けているのである。

むすびにかえて

こうした『オリエンタリズム』批判に立脚した研究潮流は、学問研究としてのみならず、——著者たちにその意図があるかどうかは別として³¹——実は、政治的なメッセージを発している、筆者は受け取っている。

近年しばしば耳にするイスラム脅威論や、国際政治上の競争を反映させた「文明論」には、本当は政治的な性格の問題を本質論にすり替え、競争相手を分かり合うことなど不可能な異質な他者と断じてしまう危険性が潜む。

過度に単純化された本質論の罠に対して、上記のような研究が描き出してきた歴史は、それを回避する手がかりを与えているようにも思われる。『オリエンタリズム』批判が示してきたことは、現実が、「自己／他者」「敵／味方」「征服／従属」といった明確な線引きのされた対立構図に回収されるものばかりではないということ、そして、権力の「想像や知に対する掌握力」³²は絶対的なものではないという事実であった。

特に、ロシア帝国の知識人たちの事例を見せてくれるのは、混沌としながら自己と他者が交じり合う、まさに「コンタクト・ゾーン」の様相であり、そこでは差異が必ずしも排除の論理に直結するわけではなかったということである。もちろん、知と権力は危うい関係の上に成り立っているわけだが、両者が常に共謀関係にあったわけでもなければ、知識人たちの想像力がいつも帝国主義に支配されて

いたわけでもない。ロシアの「オリエンタリズム」は、用意された単純な対立図式に乗ってしまう知的怠惰と、しばしば自分を「正義の味方」の側に据えたくなる誘惑と無自覚に対しても、警告を発しているのかも知れない。

* 本稿の一部は、浜由樹子「訳者あとがき」デイ

ヴィド・シンメルペンニク=ファン=デル=オイエ『ロシアのオリエンタリズム——ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』成文社、2013年、285 - 293ページ と重複している。再掲載をご許可いただいた成文社に記して感謝申し上げる。

なお、本稿は、科学研究費助成事業若手研究B（課題番号23720042）ならびに基盤研究B（課題番号24330055）の助成を受けた成果の一部である。

注

- 1 Edward W. Said, *Orientalism*, New York: Georges Borchardt, 1978. (エドワード・W・サイード、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上・下、平凡社、1993年。本稿での引用は、この日本語版からのものである。)
- 2 Robert Irwin, *For Lust of Knowing: The Orientalists and their Enemies*, London: Allen Lane, 2006; Robert Irwin, *Dangerous Knowledge: Orientalism and its Discontents*, Woodstock: The Overlook Press, 2008.
- 3 Susan Layton, *Russian Literature and Empire: Conquest of the Caucasus from Pushkin to Tolstoy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- 4 Yuri Slezkine, *Arctic Mirrors: Russia and the Small Peoples of the North*, Ithaca: Cornell University Press, 1994.
- 5 Mark Bassin, *Imperial Vision: Nationalist Imagination and Geographical Expansion in the Russian Far East, 1840-1865*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- 6 Robert P. Geraci, *Window on the East: National and Imperial Identities in Late Tsarist Russia*, Ithaca: Cornell University Press, 2001.
- 7 Daniel R. Brower and Edward J. Lazzerini eds., *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917*, Bloomington: Indiana University Press, 1997.
- 8 このテーマをめぐる誌上での論争の成果として、Michael David-Fox et. al. eds., *Orientalism and Empire in Russia*, Bloomington: Slavica. 2006, 特に、第1部と第2部を参照。
- 9 サイード『オリエンタリズム』上、51ページ。
- 10 カルパナ・サーヘニー、松井秀和訳『ロシアのオリエンタリズム—民族迫害の思想と歴史』柏書房、2000年。サーヘニーに対する批判としては、木村崇による書評、『ロシア語ロシア文学研究』（日本ロシア文学会）33号、2001年 を参照。
- 11 とはいえ、依然としてサイードの概念設定をほぼそのまま受容した研究は発表され続けている。最近の例として、Alexander Etkind, *Internal Colonization: Russia's Imperial Experience*, Cambridge: Polity Press, 2011.
ちなみに、日本における研究動向は少なからず欧米の影響を受けているといえるが、『オリエンタリズム』への拘りはそこまで強くはない。そもそもこうした議論の枠組そのものに対する批判的観点を持って書かれた日本人研究者の研究として、乗松亨平『リアリズムの条件—ロシア近代文学の成立と植民地表象』水声社、2009年。
- 12 最初期の成果として、例えば、Andreas Kappeler, *Russian Empire: A Multiethnic History*, Harlow: Pearson Education, 2001. (オリジナルであるドイツ語版は1992年刊行。)
- 13 Willard Sunderland, *Taming the Wild Field: Colonization and Empire on the Russian Steppe*, Ithaca: Cornell University Press, 2004.
- 14 Robert D. Crews, *For Prophet and Tsar: Islam and Empire in Russian and Central Asia*, Cambridge: Harvard University Press, 2006.
- 15 Michael Kemper and Stephan Conermann eds., *The Heritage of Soviet Oriental Studies*, London: Routledge, 2011.
- 16 David Schimmelpenninck van der Oye, *Russian Orientalism: Asia in the Russian Mind from Peter the Great to the Emigration*, New Haven: Yale University Press, 2010. (デイヴィド・シンメルペンニク=ファン=デル=オイエ、浜由樹子訳『ロシアのオリエンタリズム—ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』成文社、2013年。)
- 17 Vera Tolz, *Russia's Own Orient: The Politics of Identity and Oriental Studies in the Late Imperial and Early Soviet Period*, New York: Oxford University Press, 2011.

- ¹⁸ Tolz, *Russia's Own Orient*, pp.100-101. トルツは、サイドが『オリエンタリズム』執筆に際して、エジプトの社会学者、アヌワル・アブデル=マレクに多くを負っていたこと、そして、そのアブデル=マレクは、ロシアの東洋学者セルゲイ・F・オリデンブルクの記述を基にした1951年の『ソヴィエト大百科事典』から、ヨーロッパの東洋学に対する批判的議論を導き出していること、つまり、サイドは間接的にソ連の議論から影響を受けていたことを発見した。
- ¹⁹ Крылов К. Итоги Саида: жизнь и книга // Эдвард Саид. Ориентализм. СПб., 2006. С.626-627.
- ²⁰ Там же, С.634.
- ²¹ Там же. С.598-599.
- ²² 中東研究者の酒井啓子は、北米中東学会の年次大会でのサイドとバーナード・ルイスの「伝説」の論戦を紹介しているが、これは、人文学者と地域研究者の論争、ならびに学問と政治との関係に関する論争が、「パレスチナ擁護者」対「シオニスト」という政治的立場の対立に回収されかねない可能性を反映したエピソードだともいえよう。ロシアにおけるサイドの受容の仕方は、まさにこの問題性を映し出している。日本国際政治学会 Newsletter, No.134, 2012年12月、1ページ。
- ²³ ただし、この傾向は、必ずしもロシアのみに観察されるわけではない。サイドが、『オリエンタリズム』刊行後に始まる「新冷戦」と呼ばれた緊張下のアメリカにおいて、パレスチナのため、第三世界のために発言を続けていたことの意味は、今日の地域研究者に、学問と政治的現実、「客観性」と無関心の関係について改めて自省を迫っている気がしてならない。
- ²⁴ 例えば、Бартольд В. В. Работы по истории и филологии тюркских и монгольских народов. М., 2002; Бартольд В. В. Работы по истории ислама и арабского халифата. М., 2002; Бартольд В. В. Ислам: культура мушльманства, мушльманский мир. М., 2011.
- ²⁵ История отечественного востоковедения. Т.1-2. М., 1997; Классическое востоковедение и классический ориентализм. М., 2003.
- ²⁶ 例えば、Восток в русской литературе XVIII – начала XX века: знакомство, переводы, восприятие. М., 2004.
- ²⁷ Крылов, Итоги Саида. С.599.
- ²⁸ この流れを形成するにあたって決定的な影響力を持った研究として、Homi Bhabha, *The Location of Culture*, London: Routledge, 1994.
- ²⁹ Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 2nd ed., London: Routledge, 2008 (1st ed., 1992).
- ³⁰ Richard White, *The Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650-1815*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- ³¹ メアリー・ルイズ・ブラットは、著書の第2版の「まえがき」に、2003年にブッシュ政権が「人民の解放」を掲げてイラクに派兵したことを、1917年のイギリスのバグダード占領と並置して、帝國的思考が今でも刷新され続けていること、世代を超えて対立が継承、再生産されていることに対する危機感を表している。これをもって、彼女が、自身の本が持つ政治的メッセージに自覚的であったと解釈することもできるだろう。Pratt, "Preface to the Second Edition," *Imperial Eyes*, 2nd ed., p.xiii.
- ³² Ibid.